

朱き鬼の物語

津雲英典

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

都に仇を成す首吞童子の生まれ、育ち、行いを首吞童子側から書いてみました。

今回は、生誕編です。

好き勝手に描いてますから、皆さんも好き勝手に馬鹿にしてください。

目次

生誕、
或は降臨

1

生誕、或は降臨

ホギヤア、ホギヤア、ホギヤア…。

一つの命が生まれた。

赤々と染まつた手足を伸ばし、もがくように何かを求め赤子。

だが、求めに応える者は無い。

立ち会つた産婆は、赤子を産湯に浸しながら、その子に呟く。

「不憫な子じゃ…」

その子は、多くの者に望まれない子供だった。

その子は、存在してはならない子供だった。

その子を望んだ者は、既に死んでいた。

とある貴族がいた。

貴族は、金と権力を元手に欲しいまま、望むがままに生きていた。

そして女がいた。

女は、貴族の家に奉公していた。

やがて女は、貴族の目に留まり、貴族は女を口説き、抱いた。

女は、貴族を愛し、求めた。

そして、子を宿した。

…だが、貴族とその周囲の人間にとつて、宿った命は望ましい存在（もの）ではなかった。

「決して、誰の子なのかを明かしてはならない。もし明かせば、この国をも揺るがし、分かつ事に成りかねない。何よりも、お前達親子の安息すら奪うだろう。それはお前達も望まない、そうだろう？」

女は首を縦に振る。

そして、僅かな金とまだまだ小さな命だけを共に、女は暇を出された。

実家に帰った彼女達は、家族にさえも冷たく扱われていた。

彼女もまた、貴族の出ではあつた。

尤も、奉公先とは比べものにならない程の身分ではあつたが。

”誰の子かもわからない子を宿し、暇を出された”

口さがない者達は、彼女をそう蔑んだ。

そんな肩書がついた彼女は、実の家族でさえも持て余される存在だった。

だから、中絶を勧められたりもしたのだが、彼女はそれを拒み続けた。

墮胎の為の薬を盛られそうにもなつたが、女のカンとも言うべき何か、その悉くを

見抜き、全てを退けた。

「大丈夫よ、私が貴方を護つてあげる…」

強く、優しい母の姿がそこにはあった。

そんな彼女にあてがわれたのは、日の当たらぬ庭の片隅の小さな小屋だった。

人目につかぬように、目立たぬように、静かに過ぎ行く日々を送る女。

それは、決して退屈などではなく、自らの希望や期待と向き合い、文字通り胸とお腹を膨らませながら過ぐす日々は、幸せそのものだったのかも知れない。

そして、臨月がやってきた。

身動きもままならず、眠りも妨げる程に膨らんだ彼女の希望は、その身に大きな負担と期待を与えていた。

だが、それは唐突に訪れた。

激しい痛みと、”出よう、また、出そう”とする動きは、彼女の限界を超える負荷を与えるが、その苦しみにさえも彼女は抗い、戦う。

急いでやってきた産婆は、出て来た子供の一部を見て顔を蒼くする。

「…逆子じゃ」

大きな足が、産道から飛び出し、暴れるように動いていた。「いいか!?ワシが合図をしたら、必死にいきめ!!わかったな?」

産婆の声に、彼女は弱々しく頷いてみせるその顔には、脂汗を満面に噴き出していたが。

「…ヨシ、今じゃ!!」

歯を食いしばり、伸ばした手を爪が食い込む程に握り締める彼女。

それに合わせ、赤子を傷付けない最大限の力をもって、引き出す産婆。

「…オオ、ようやくた、ようやくたのう。お宝の付いた、立派な男の子じゃあ…。ほーれ、母御じゃぞう…」

産声すら上げていない子供を彼女に差し出す産婆。

「…私の、…私の子…」

絶え絶えの声で、そう言いながら彼女は、我が子に手を差し出す、その手がフツと遠退いていく。

パフツと、身を分け軽くなった身体が、布団へと倒れ込む。

「どうした? しつかりせえ!! お前が母になったんじやろ?」そんな産婆の声が、彼女に届く事はなかった。

彼女は、既にその息を止めていた。

それと引き換えるかのように、赤子は産声を上げた。

生まれた子供は、やはり厄介者でしかなかった。

残された彼女の親族は、子供を亡きものにする為に、山奥に乳飲み子を棄てた。そして、二人を亡きものとした。

コレが、彼の生まれであった。